

二、アブ・フレイラ

ヤンガー・ドリアスによる深刻な影響は、シリア ユーフラテス川沿いに長期にわたって存在した居住地から、驚くほど完璧な記録が得られている。一九七〇年代にシリア政府はユーフラテス川の水を利用しようと、野心的な水力発電計画に乗り出した。川にダブカ・ダムを建設してアサド湖をつくる工事を含んだプロジェクトだった。ダムによる氾濫で多くの考古学遺跡が沈むことになり、その中にアブ・フレイラという名の広さ一一・五メートルのテル（人間が長期に居住した結果出来た丘）も含まれていた。科学にとつて幸いなことに、この古代の村が水没する前に、イギリス人の人類学者アンドリュウ・ムーアが村を徹底的に調査することが出来た。ムーアは緻密な発掘作業を続け、ヤンガー・ドリアス期にナトゥーフ人やその同時代の人が見舞われた悲惨な状況を記録にとどめた。

アブ・フレイラは一万三五〇〇年前頃、小さな村として興った。住居は一部分が地面に掘られた単純なもので、屋根は木の柱で支えられ、小枝と葦の束で葺いてあった。ムーアは、住居の穴の中に詰まったやわらかい土と、手つかずの硬い土とを区別しながら、細心の注意を払って家を掘り出した。厚く積った灰と砂土の堆積物は、何世代にわたって人が居住していたことを示しており、ムーアと同僚はそれらを目の細かい篩ふるいにかけて。それから、彼らは大量の土壌試料を浮揚装置にかけた。この装置は何千もの細かい種子とその他の植物の残滓、および魚の骨や小さいビーズを、まわりを覆う物質から分離させるものだった。

た。浮揚装置のおかげで、ムーアは七一二の種子サンプルを入手した。それぞれの試料には一五〇個以上の食用植物の種が五〇〇個ほども含まれていた。これによって植物学者ゴードン・ヒルマンは地の利のいい場所に位置していた一万三〇〇〇年前の村でどんな植物が採集されていたかを再現することが出来た。この村の南方には、水の豊富なユーフラテスの氾濫原があり、北方には今日と同じく、ステップの草原が広がっていた。オーク、ピスタチオなど実のなる木が生えた広々とした森が、歩ける距離にあった。現在は一番近い森へ行くにも西へ少なくとも一二〇キロは歩かねばならないだろう。

一万三五〇〇年前には、森がもつと近くにあったことはわかっている。定住地の植物試料から、ブラックベリー、プラム、セイヨウカリンの種、および同じ森に生えている白花のツルボランをヒルマンが発見しているからだ。すぐ近くで採れない限り、こうした森になる果物は、量のいかにかわかわらず、利用できなかつただろう。今日では、最も近くにあるピスタチオでも、九〇キロ離れた高原にある。ヒルマンは、かつてピスタチオの木が、村のすぐそばにある低地のワジ（涸れ川）の段丘にずらりと生えていたと考える。春と夏とは、住民は小麦と二種類のライ麦を簡単に手に入れることが出来た。こうした雑穀はオークの森との境目に生えており、必需食品となっていた。今日、人の手を介さない状況では、そうした雑穀はアブ・フレイラから一〇〇キロ圏内では育たないだろう。

五〇〇年の間、アブ・フレイラの人々は、身近な場所にすぐに利用し得る植物性植物があった上に、食肉も確実に手に入った。彼等が食べた肉の八〇パーセントは、砂漠のガゼルのものだった。猟師たちは単

独行動をする動物をわざわざ狩りに出かけることはなかった。それよりも、初夏の数週間に、ガゼルが豊かな牧草を求めて北の谷間に移動してくると、群れを襲って大量に仕留め、生まれたばかりの子を含め、あらゆる年齢のガゼルを殺した。時には群れを丸ごと殺してしまうこともあった。こうした食糧源——ガゼルの移動、春の野草、秋の豊富な木の実——は皆、アブ・フレイラの人々に予測し易い食べ物を提供していた。

保存の容易な食糧がうまく組み合わせられたおかげで、彼らは何世代にもわたって同じ場所に留まったのである。しかし手間暇のかかる食糧に依存していた為に、狩猟グループや、植物性食物を集める家族を除けば、誰も村を長く離れるわけにはいかなかった。かつてのケバラ人のような移動力はどうに失われており、乾燥化の進む気候に適応するアブ・フレイラの人々の能力は、著しく制限されていた。彼らはある一線を越え、環境に対して脆弱さをさらけ出していた。

一万三〇〇〇年以後は、社会的な柔軟性と移動力による従来の戦略は、もはや役に立たなくなった。それはアブ・フレイラの村人だけでなく、西南アジアの地に住んでいた数千人の人々にとっても同様だった。肥沃な三日月地帯のどこでも、人々は食糧のある場所に集まり、何世代にわたって同じ定住地に住み続けた。この移動力の損失は、一般に考えられているように、農耕が始まったためにもたらされたのではなく、むしろ一万五〇〇〇年前以後、地球温暖化によって二〇〇〇年にわたって降雨量が増加した結果なのである。この温暖化により、数千キロ離れた北アメリカ大陸で、ローレンタイド氷床の後退から生まれた巨大

なアガシー湖が決壊、大西洋に大量の淡水が流れ込むと、大西洋の海流が止まり、地球規模の寒冷化と、西南アジアは一〇〇〇年にわたる干ばつに見舞われ、既に定住を果していた肥沃な三日月地帯の住人は大打撃を受けることになるのである。

干ばつの影響は、アブ・フレイラにもほぼ即刻もたらされた。一万三〇〇〇年前ごろには、人々は森の周辺部から果物や木の実を集めるのをやめた。おそらくそうした森がもはや彼らの定住地のすぐ近くになかったからだろう。同時に、彼らはますますナガホネガヤやツルボランの種子をはじめとする雑穀に関心を向けるようになった。アブ・フレイラの植物相を研究したゴードン・ヒルマンは、長期にわたる干ばつによって森林限界が後退するにつれて、これらの野草の分布域が広がったと指摘する。うっそうと茂っていた森がまばらになるにつれ、低い場所に生えている草にも日光が届くようになったのだ。四〇〇年後の一萬二六〇〇年前には、ツルボランも雑穀もアブ・フレイラから姿を消した。ピスタチオの小果実ですらあまり見られなくなった。明らかに、周囲の環境は、もはや村の密集した人口を支えきれなくなっていた。西南アジアの定住地はそこそだが、アブ・フレイラも降雨パターンがごくわずかに変わっただけで、植生に大きな変化が起りうる地域にあった。時代とともに、この一帯はいっそう乾燥していき、森林は歩いて行かれない距離まで後退した。当初人々は小さい種子のなる野草など、代替の食糧で間に合わせて、雨の降らない状況に順応していた。

一万二〇〇〇年前ごろ、彼らはしかるべき次の手段をとった。自然の収穫を増やすために、野草の栽培

を試みたのだ。こうして村に最初の栽培植物の種子——ライ麦、ヒトツブコムギ（アインコロン——野生の小麦の一種）、及びレンズマメ——が登場したが、すべての人間を養えるほどの収穫にはならなかった。長年よい生活をしてきたので、村の人口はおそらく三〇〇人から四〇〇人に達していたのだろう。この人口は、七、八〇〇年後、日本列島では縄文最盛期の最大遺跡、三内丸山集落の人口に匹敵するものだった。移動生活によって制約を課せられた頃とは較べられない人口密度である。アブ・フレイラのような永住地は、木の実の収穫がなくなり、深刻な日照りで粗悪な食糧ですら手に入りにくくなれば、もはや存続しえない。寒い冬の日に、腹をすかせた家族が住居のなかで身を寄せ合っている姿は想像できる。森林のなくなった乾燥した土地では、薪にすら事欠いただろう。穀草でいろいろ実験は試みたものの、アブ・フレイラは長引く干ばつに苦しめられた。実験が始まっ

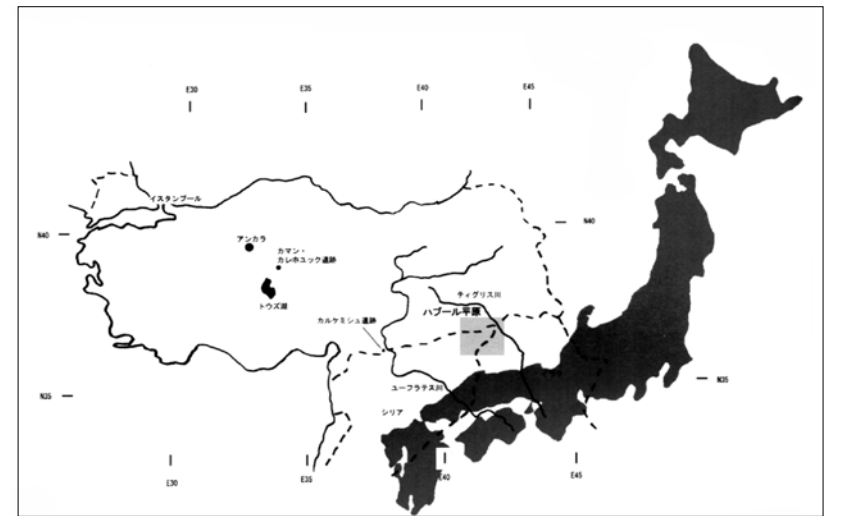


図4 14000年前頃と13000年前の水面

てから数世代後に村は放棄された。放棄が計画的に行われたのか、漸進的なものだったかは、我々には知る由もない。だが同族の援助も差し伸べられず、食糧源は乏しくなり、干ばつは一向に終わる気配がないとなれば、たとえどんな犠牲を払おうと、昔ながらの移動生活に戻ることが唯一残された道だった。

最終最大氷期、西南アジアは砂漠に近い状態であったが、同緯度にある東の日本列島は（図4）ユーラシア大陸とつながっていた北海道を除き、四海の海に囲まれていて、適度な雨も降り、気温は低くても草原と針葉樹の粗森の世界であった。地球大温暖化が始まる少し前、彼らは土器を発明していて、植物性植物を賢く利用し始めていたが、土器はまださほど普及していなかった。一方弓矢は持っており、狩猟活動は盛んであった。

一万三〇〇〇年にわたって日本列島に特殊な文化を築き、現在の私達の暮らしの大きな礎となった縄文時代、その特色はさまざまに語られるけれども、それ以前の時代と区別する鍵は、土器と弓矢の出現、定住生活の開始、さらに精神文化の成熟（石偶や土偶や装飾品の発生）に求められるであろう。

一万五〇〇〇年前、地球温暖化とともに日本列島では縄文時代が始まった。同時代の西アジアのナトゥーフ文化と比較を試みたい。縄文時代の始まりを考察するのに適した遺跡として、愛媛県上黒岩岩陰遺跡がある。標高四五〇メートルの溪谷山中である。中学生が大量のカワニナを発見したことから、本格的な発掘が始まった。多数の土器片や人骨が出てきて研究者を驚かせた。丁寧な発掘により土器の出る第九層より一万四五〇〇年前の隆線文土器が、次いで古い第六層よりは無文土器（約一万二〇〇〇年前——ヤン

ガー・ドリアス期)、最も新しい第四層からは押型文土器とともに多数のカワニナが出土した。本遺跡はそのロケーションからして、草創期には狩猟に特化したキャンプサイトであり、冬には暖かい土佐湾や愛媛の海岸に移動していたと考えられる。動物骨の出土は姉崎さんの分析によると、ニホンカモシカが最も多く、ついでニホンイノシシ、カモシカ、ニホンザルが多い。他にイヌやアナグマ、タヌキ、ニホンオオカミ、オオヤマネコ、ニホンカワウソ、イタチ、ツキノワグマ、ウサギ、ムササビ、ネズミ類など十八種類が確認されている。西アジアの人達の動物性栄養は八〇パーセントまでがガゼルで、乱獲をしていたのに対し、初期の縄文人は資源保存に気を配りながら、食べられるのは何でも食べていたようである。時はヤンガー・ドリアス期、冬の間は暖かい海岸に移動し、植物資源、海洋資源を利用し、上黒岩では放置して資源の回復を待つというのも優れたやり方と思われる。

縄文早期になると、土器量も増え、次第に移動が困難となり、また環境も変化して植物資源の利用が増加すると、土器が必要となり、同時に小型獲、カワニナ等貝類の捕食が増加することで、一ヶ所または小範囲の特定地域への滞在が居住システムとして採用されていくと考えられる。

日本では、後氷期（一万数千年前）に土器が発明されたが、すぐには普及しなかった。一万五〇〇〇年前以後隆線文土器が全国的に作られるようになったが、植物食品加工のためのスクレイパー等は普及していない。土器は当初は食物の煮炊き、保存、アク抜き等に使われていたようで、西アジアの人々のように多大な労力をかけ、そのため定住し、ドングリからパンを作るといったことはしなかったであろう。

まだ気候が不安定なヤンガー・ドリアス期、ナトゥーフ人のライフスタイルよりも上黒岩陰遺跡の縄文人の方がはるかに気候の変化に適応した生活だったのではないだろうか。最近のマスコミ報道で、縄文草創期（一万五〇〇〇年前）の縄文人がなだらかな肩のライン、胸の豊かな膨らみ、腰のくびれのある土偶を作っていたことを知った。また黒岩遺跡に住んだ人達が二匹の犬を丁寧に埋葬しているのを知り、彼らの優しさに感動した。そして決して縄文人は野蛮人ではないと思った。

私はこの本にまとめてみて思うのであるが、食糧が充分にあって住み易い所が見つかる、近隣から次々人が集まってきた、人口密度が高くなる。良い点はさまざまなアイデアが出され、技術革新が起り、さらに住み易くなる。欠点は移動性の欠如で、気候の良いうちはいいのであるが、ひとたび乾燥化に見舞われると、もはや増大した人口を養っていけなくなる。ガゼル乱獲もそのためなのだろう。このように自然の意向を無視して自分達で自然を作りかえる、これがこれから先メソポタミア文明以後見られる現象と思う。一方、上黒岩の早期縄文人は、夏の間は涼しい高地で、主として狩猟を行い、他の季節には暖かい海岸地帯で植物採集、海の資源を活用し、四季を通じて無理なく食糧確保を行っていた。アブ・フレイラの人達もユーフラテス川の恵みを利用しておれば、あのような悲劇に遭うことはなかったのではなからうか。早期の縄文人にとって、すでに広く普及していた土器によるアク抜きは、食糧確保に大きく役立ったのであろう。